Japanese Association for Religious Studies

を比較考察した。その結果、必ずしも両者とも組織的で華々しい活動ではないが、小規模神社の事例では小さくささやかに、地域神社と一神職が、被災地の人々とつながっている事実を明らかにした。その上で大学の活動も学生個人の思いを地域の多様な社会資源とつなげることで、かえって地域を意識した「神道系らしい」支援になっていることを推測した。

司会兼コメンテータの黒崎浩行は、この六ヶ月に宗教研究者が行った取り組みとして、稲場・榎本発表に関わる後方支援としての情報共有、弓山・板井発表に関わる大学が行う支援活動に加え、諸宗教による支援の連携に向けたコーディネートを挙げた。さらに、現在の社会状況に対して宗教はどのような力をもつのかを問い直すことが今後重要だとした。

フロアからはパネル企画の意義自体を問う意見が多く寄せられた。何よりもまず被災地に入り、現地の声から日本社会の仕組みを問い直すのでなければ宗教者の支援も行政の枠にはめられてしまう。宗教がなぜ災害に関わるかという根本問題が解かれていない。宗教系大学が建学の精神をどう発揮するかといった模索を共有することが重要。社会貢献、公共的価値のあり方に向けて議論し、問題を浮かび上がらせることが学問の役割である。

現在も続いている東日本大震災における宗教と関連する様々な取り組みの現状や応答、現代社会における宗教の社会的関わりについて考える貴重な場となった。

「社会貢献」の霊的次元
――日本仏教からの再考――

代表者　戸田游晏
コメンテータ・司会　實川幹朗

「社会貢献」と日本仏教

戸田游晏

日本仏教が生き残る手立ては「社会」が求める事業への参画にあると、「社会参加」僧侶らの「利他」の実践に寺院や僧職の将来的な存在意義を見出す論が展開されている。

宗教は元々、社会事象である。仏道の実践者たちは上古来、四箇院（敬田院・療病院・施薬院・悲田院）設立の伝承が示すように、生老病死への「ケア」に臨んできた。仏教の導入は国家鎮護を図るものであったが、観音や薬師、地蔵への信心は普く広がり、土着信仰と融合し、互助組織や金融等社会制度とも結びついてきた。ただしそれらは、近代合理主義とは異なる様態において、宗教的特性を生かしつつ運用されていた。

近世に至り、僧侶は、布教を制限され特殊な官吏として国家体制に組み込まれたが、生老病死に係わる広範な社会実践は維持していた。ところが明治維新を境に、僧侶は葬祭と先祖祭祀に職域を限定される。明治五（一八七二）年の教部省の設立、神官と共に教導職に任命される等、僧侶は世俗の一専門職とし

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

て再び国家体制に組み込まれた。同年の肉食妻帯追認の布告は、近代国家が一般人としての資格を新たに与えたとも解釈できる。

いま、企業のCSRや学術の社会貢献と同じ範疇で、「宗教の社会貢献」が語られる。

明治の「国家」が、戦後民主主義体制の「社会」と差し替えられたかのようである。

事新しく「社会貢献」の標語が力を持つことは、宗教が「社会貢献」していないとの合意を言外に伝える。だが、「社会貢献」が言葉にし難い霊的次元からの謂わば〈お蔭〉の働きに裏打ちされることを自覚する実践者は少なくないだろう。「科学」や「資本」の言葉で語られる「貢献」の枠組の探究が、「近代」の根もとを見定めていくことに繋がる。

国策により、自然科学が立証しない呪いや儀礼が排斥され、個人の内面や社会的に産出される「表象」作用として扱う、人間中心主義に依拠した「心理学化」が進められた。

現代医学は生老病死を通して関与し、官主導で構築された突出した地位を保つ。だがかつて、寺院は心身療養・修養の場所を提供し、経験的本草学による治療や加持祈禱が施された。それらを「迷信」、最大限に評価し「プラセボ」と見做すのが、近代の「心理学主義」である。近世、合理主義思想（山片蟠桃、富永仲基の無鬼論等）が正当と認められようとも適用場面が限られるのが世の暗黙の了解だった。が、後期近代は、むしろ全体主義を齎す。二〇一〇年八月二四日付日本学術会議会長金澤一郎談話は、社会常識の形成を権威が推進する、明治の国策の延長線上にある。「パラダイム」概念提唱以来、論は尽くされ、「科学性」とは特定の文化的価値と見做される。にも拘わらず、寧ろそれ故、金澤談話が代表する科学主義が文化的強制力を揮う。宗教者の職務を「感情労働」で切り抜くのと同じく、これらが、宗教の次元の広がりを不当に狭める理解へと導く。

日本仏教の特性である祈禱も死者供養も、対象を遍くする「ケア」の実践である。祈禱は神仏と人が一身となりこの世の安寧と人々の幸福を祈り、死者供養は、この世を超えた人びとの繋がりのうちに救いと安らぎを求めてきた。これらは「社会貢献」ではない。

脱魔術化された社会常識は、「効果」を科学の方法で判定する。この状況が、僧侶らの立場を境界的なものと成らしめる。かつて、明るい昼間の翳りのない明晰な意識とは異なる心の働き、いや霊のうごめきが世界を覆っていた。宗教の本領を考えるには、この次元に通ずることが不可欠である。にも関わらず、「葬式仏教」と僧侶自らが嘲り、世間の揶揄に反論できない。これこそ、極めて深刻な死の軽視、さらには「あの世」を含む霊的次元を無みすることではないか。表に見える社会事業実践が、裏側の霊的次元との確固とした繋がりを保つ〈験力〉に支えられてこそ、日本仏教の「社会貢献」は成り立つ。

NII-Electronic Library Service